





祐海

百人一首師說抄









武庫川女子大学図書館	
昭和27年2月15日	911.147
247157	Yu

候印

武庫川  
院蔵書印

夏ノ首所説教

一 夏ノ首所説教 宗廟に於ては 色紙の如き  
新古今撰後編 宗廟に於ては 色紙の如き

一 新古今撰集れ夏

依後鳥羽院の院宣建元元年十二月に於ては 行寛寓  
元久二年四月に於ては 行寛寓  
依後鳥羽院の院宣建元元年十二月に於ては 行寛寓  
依後鳥羽院の院宣建元元年十二月に於ては 行寛寓

一 宗廟に於ては 色紙の如き

父後鳥羽院 元久元年十二月に於ては 行寛寓  
依後鳥羽院の院宣建元元年十二月に於ては 行寛寓  
依後鳥羽院の院宣建元元年十二月に於ては 行寛寓  
依後鳥羽院の院宣建元元年十二月に於ては 行寛寓

武庫川  
院蔵書印



實は根を以て花と枝葉に分るなりされど實の  
の迷離より実を心に留めざる物に撰集ゆゑこの所は  
風俗世々人のうね成たりありあへずのちり

[illegible]

一又此一人言一通具有衆長也其方人の言不<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>は元の言を余  
多<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>古今に何<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>やも世<sub>レ</sub>の言は定<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>の言の如<sub>レ</sub>く叶<sub>レ</sub>さる<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>也

○ 一天智天皇

智陽よりすそを代りて、魚よりて、田中氏を自や

神明天皇  
 天智 持統  
 天武 元明

孝一と稱されしを過る智恵に<sup>にきこゆ</sup>に<sup>た</sup>に<sup>し</sup>  
 舒明天皇皇子<sup>母皇孫</sup>舒明天皇<sup>と</sup>げ<sup>毎</sup>后より<sup>太平</sup>隆昌初  
 の<sup>創</sup>より<sup>在</sup>位十年遷都と<sup>述</sup>す<sup>小</sup>志<sup>高</sup>勢<sup>衣</sup>号<sup>大</sup>陳<sup>文</sup>  
 近江帝又葛城天皇と<sup>大</sup>化十年<sup>壬戌</sup>十二月三日崩<sup>年</sup>八歳

秋の田よりほの店の逢成はるを成<sup>り</sup>とて是處より行く  
後撰

世芳士成りて風より上るれ方きこふ事無うとていふに似たり  
初より人々々々れも能く吟をわをほつて来りてなり祇原ふ  
所撫へ店倒れに重頭とてり撫へて泣きあはせり品々々とてい  
ふとて泣き泣きの中ふ修店の店へいふ修物へ店の中  
よりきなり店とていなり

母方心と民此同然すれ帝方此天子の之に付れと有るを  
 その心と民とを字民の字をふうけくつるをとり











子より尾雄なりてずはとの雄雄頭よりなつてく叶て云ふ  
 今より雄より尾の雄よりなつてく叶て云ふは尾より雄なり  
 品より雄なりは尾より雄なりは尾より雄なりは尾より雄なり  
 品より雄なりは尾より雄なりは尾より雄なりは尾より雄なり

一いふ題に於て首目并ふ一題成所トク一う時二至れぬ事  
 遠きとて冷泉に於て都に於てとて所状に於て論の  
 有る事これと遠きの方より拾遺傳より所と遠きと成  
 用也是故設す一とて遠きより子細に上古の心源河漢云  
 然るより終迄とをいふと居て成る一長きと云々然  
 かし何と云へば一とてこれより一とて終迄云々一とて終迄  
 又仍る一とてのより云々然るより一とて終迄云々一とて終迄

○ 斗 尺

文祖不詳神龜五年此の人とき或る武の所何の令  
うゝ一役人凡 日ぬの人をうゝ

戒於云希人、新國、山、道、都、人、之、往、也、今、よ、う、す、と、に、柳、の、ま、り  
 下流は清水乃すに流るゝとて、人、の、ま、り、と、ま、り

田中浦の事くくは後人一般の軍人より後小書を終は

[illegible]

東鑑  
常家の法一也うたふ書を大いにも書かざるためとす  
云々之をうたへて一編一冊常々京師に於てはたすを要す



官制付分等なり知也云々或一記形長め云々此は近江の  
後九云々の面毎云々云々

昭使に後九云々は法王の時を云々凡そ人をもふに凡九  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
有る事云々後九云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々

奥山に紅葉云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々の秋分云々云々紅葉の秋分運運云々云々云々云々  
云々云々云々云々

就中紅葉云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

MMOL

右付の宿祿云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
春云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
人云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

猶も後九云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々の秋分云々云々紅葉の秋分運運云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々















市橋やう漢人へ傳へる也と云ふは、  
市橋は、  
集の集、  
入る、  
三、  
中、

市橋やう漢人へ傳へる也と云ふは、  
市橋は、  
集の集、  
入る、  
三、  
中、

市橋やう漢人へ傳へる也と云ふは、  
市橋は、  
集の集、  
入る、  
三、  
中、

市橋やう漢人へ傳へる也と云ふは、  
市橋は、  
集の集、  
入る、  
三、  
中、

市橋やう漢人へ傳へる也と云ふは、  
市橋は、  
集の集、  
入る、  
三、  
中、

板説

市橋やう漢人へ傳へる也と云ふは、  
市橋は、  
集の集、  
入る、  
三、  
中、

市橋やう漢人へ傳へる也と云ふは、  
市橋は、  
集の集、  
入る、  
三、  
中、







うして元の字紙り分てゐるやういふ山表れ返り候に  
あが紙紙よとて海より来るふゆのまうりやうと云ふ  
御うへえきう御之候れやと云ふ事と世れいふ人共  
はあはれいふやうな事と云ふなりお氏め返すやうな事  
は返さる候事不用と云ふ

[illegible]

○ 禪

仕の天皇に時を告げし居室のしるしをふ道むの人あり  
或る御側目振云仙人成と云て夜半のしるし云々

長崎の書あり深き帝の所使して奥本宗實に賜ふ  
 り又亮孝丸の時信雅といふ位の子といふやも在の時より  
 前より事海内を送るれも終凡仙今より云々亮孝の兄と  
 といふせりや我かやわたり師より為の事とむや

後撰  
こゝろやあのかき帰りの信をうけりて  
分り合ふに  
あはれ

[illegible]



[illegible]

卷十 詩

夫之儀也

宋高子性是小也予考歸去來或云彼年星化化星云

源家天皇は、この年の秋に本宮の御時遣唐使之事に依り、兼和五年  
十一月九日に洛陽に入られ、死流せられた。その二年月に兼和七年四月、  
今令仁親王が入京し、一泊して七十九日有る古海より歸り、  
或る系を断ちて病書の中に入り、いふ流寇にあり、古来か  
これ大波なりと云ふ可なり。没は一糸の縁同く、慈定王所國の  
渡唐の時事にして、是に然二年七月、平らに卒ありと云。

無惡善

神田系、鶴ヶ谷、豊後、一、江、市、あ、は、河、丹

[illegible]















[illegible]

定取口の溪谷

[illegible]

在保業年朔  
武揚云業年四  
名晉阮雅錄云

真如の弟子に、十六歳の時、延寧寺に住し、後、玄奘と  
 多識の二僧の四府京防保親王の弟、從父兄なる在唐  
 僧中興、兼、右僕射守、沙州と桓城大皇帝の收得、定國親  
 王の、淳和の弟、元長二年、八月に生じ、仁明天皇、沙州  
 兼、永平二年、二月に初、三月に仁明文德、神祇の御、は  
 け、高麗天皇、仁明元年、四年、五月に、百未、冠、乙未  
 乙未に、乙未







式めかしひりゑきくわうしき中にあるいんや  
申つれもあつた人御ふ人の御あはれおかしき  
何れも物々ゑのうしきをうけし御あはれおかしき  
簾神の御あはれしき御あはれしき御あはれしき

江戸

江戸寺有系継落さす七束院のめさうり

昭宣公ノ娘七条ノ中宮ト云

継落は日野の元祖真友より二世孫へ継落大如信房の御あはれ

那波

すきくわうしき中にあるいんや  
申つれもあつた人御ふ人の御あはれおかしき  
何れも物々ゑのうしきをうけし御あはれおかしき  
簾神の御あはれしき御あはれしき御あはれしき

すきくわうしき中にあるいんや  
申つれもあつた人御ふ人の御あはれおかしき  
何れも物々ゑのうしきをうけし御あはれおかしき  
簾神の御あはれしき御あはれしき御あはれしき

那波

すきくわうしき中にあるいんや  
申つれもあつた人御ふ人の御あはれおかしき  
何れも物々ゑのうしきをうけし御あはれおかしき  
簾神の御あはれしき御あはれしき御あはれしき

那波の御あはれしき御あはれしき御あはれしき

元段親王

陽成院第二の御あはれしき御あはれしき御あはれしき

すきくわうしき中にあるいんや  
申つれもあつた人御ふ人の御あはれおかしき  
何れも物々ゑのうしきをうけし御あはれおかしき  
簾神の御あはれしき御あはれしき御あはれしき



[illegible][illegible]

宗性法師

通眼二男俗名其利通眼お家へ後入道戒云法和  
の時勝大入富九近将軍くく初法小寺に伝え  
後長安寺に伝え一法大わの布衣居士なり

[illegible]







可成の  
言や又  
をいふ  
いよく衰  
ゆるか  
ものこと  
かきうと  
なれり  
しやう  
はあり  
旦千チデ文選のかちう

長

痛とほらふ物うふりしや  
 いふにうづらう楽天の道月清  
 蔵君羊一換君顔文と化り又見月う千端万端有思き又は  
 我中新賜是秋天秋来唯あ二人の長しと云く  
 大なる月夜をわたりて是とあはれとれと人恋心部とあ

菅家  
北野天神まつり 延保二年二月廿日 亮

大德四年九月是善公乃男大平元年改士師古人等  
賜諡善公性文德溫和侍讀文章博士曰之長者

松勘管相惣定此年に薨落ふつゝと稱す薩院の歸位迄之  
二十九年迄之相速又宇多院定此の光帝より所代中外者也

古今  
いよいよとていふも  
山紅葉丹も神のまじ

[illegible]

二条右大臣

各々 定方 蘇修等 着公 二 吊へ  
糸の太將 定國うすく







[illegible]

源家子知臣

[illegible]

九カク河カ躬クニ恒コト

此乃江戶之流也。凡壯年之流也。  
 此乃江戶之流也。凡壯年之流也。

心アテガイ  
あとおほくはなふ物なり  
今ハト入デミル  
さる旧菊れれ

[illegible]







かんやをきくことじのめ帰しひくゆきとあふ  
 肝はわんしほくと定作ものねくと云つ又わんしほくと  
 干しとあふきなりあふとゆき後きゆきとてなれ帰し  
 とゆき乃たゆきとあふとゆきとてなれ帰し  
 定まるともなれ帰しとてなれ帰し

佛子法拘也  
八  
痛  
之  
江  
使  
好  
之  
九  
不  
前  
之  
月  
定  
永

何れも夜ふけのしほり  
なみだのしほり

[illegible]

上は家入と申すはものゝと後々々々のことなすけく  
 よめは吟叶く好落ふみは是則ち後撰の撰者なりぬ  
 因うては戯れ文に大因記 此書は乃ち新也

和歌集の巻末に  
いかに其の野の星に  
ゆきしるる雲

初書小秋國はむのすゝ雲にふくみとく陰をひく  
けふふゆー下り所照るこわほくけふ所すていふふ  
ふふふ宿候あゝ打飽ふ常新れいふやうなれりふ

[illegible]

軍や陸よりして軍は少くして事なれど別した町あるを  
 移してす<sup>ユキ</sup>雲して其のまゝたかやうにたり軍は少く  
 月より霜は少くやれ霜は少くしていふ霜野は少く  
 是則ちわをたけりてはつかりて又古井は霜は死  
 の名所なりて好い異ありてやまに又夜は霜は死  
 その名所の京制は品をたけりて月より霜は少く  
 以上は軍を少くしてはつかりて又古井は霜は死  
 以上は軍を少くしてはつかりて又古井は霜は死

二亦〇  
春道列樹  
新名在村の一男也之春道之姓也

張吟  
文の文章性  
あるがナク、チリツキルナリ

張吟  
山川風光  
人馬  
流水  
人家  
紅杏  
綠柳







蔡真風

たゞしむし下但先んて凡のまのつとに  
而へ前よりせしむる

神代のお母一つれる皇女もびんうきとて身のおく  
字号院有と始々身付しとて或は廣くのけうと道成とて  
たまふもある人もんをわねむれもつねに

はるが所一あけしとて無き一云わつとて一とて  
宗長同書に云い来す一五字云一といふは物役の  
時を與へた後うき又當時の人をん留てむれとて  
しひんうき一云わつとて一とて一とて一とて  
ねる事世はわたり人をけうとて物うて一とて  
云々一とて一とて一とて一とて一とて一とて  
老後の物うき一とて一とて一とて一とて一とて  
るる一とて一とて一とて一とて一とて一とて  
世のつとて一とて一とて一とて一とて一とて  
川方とて一とて一とて一とて一とて一とて

山寺といふところの尾上横ねかき人  
後夜のお母のけうとて一とて一とて一とて一とて

うきとて一とて一とて一とて一とて一とて  
けうとて一とて一とて一とて一とて一とて

紀貫之

左馬廐より老若れ末葉紀氏下とて一とて一とて  
一とて一とて一とて一とて一とて一とて

一はたかたれお見礼義と云紀又轉子とて一とて一とて  
月とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて  
書とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて  
一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて  
一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて  
一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて

入るのつとて一とて一とて一とて一とて一とて











九才  
参議等

二  
家  
ト  
不  
ヨ  
ム

中興皇帝<sup>ミナトクニ</sup>乃人<sup>ノヒト</sup>年<sup>ニシテ</sup>五<sup>ハ</sup>年<sup>ニシテ</sup>二月<sup>ニシテ</sup>十<sup>ハ</sup>日<sup>ニシテ</sup>薨<sup>ス</sup>ス<sup>ニシテ</sup>七<sup>ハ</sup>人<sup>ニシテ</sup>

ワシアルトコロ

海芽れ中野の榮木身も直下のまゝなまかんの氣も

思ふに人々もこの市をわたりて松をのぼる実を食ひて夜寝り  
 ぬるは海苔といひ松葉はあつた海苔といふことなれどもいふれ  
 海苔生はふと魚といふ事いふ事なりといふことと魚といふ  
 所及まゝ松を食ふといふことは是れ松のことも松といひ山野の松  
 ありて松といふに限りありて松といふて松といふて松といふ  
 何と云ふ事とて云て松といふて松といふて松といふて松といふ  
 といふ松といふて松といふ松といふて松といふ松といふて松  
 といふ松といふて松といふ松といふ松といふ松といふ松といふ

[illegible]

十四 ○  
平氣

拾遺

光孝天皇以來二世係篤濟の皇子  
後の皇子位實の皇子實の皇子父の皇子正保元年

子孫永昌

存

天徳乃言命不初悉乃定けつひたのう

[illegible]

十四  
王生忠見

三條の時を清くしし餘り市々を賜ふ  
 所なりしを忠實に忠孝の旨を三年に務め



五十年來之人生

[illegible][illegible]

清元補

深表父孫下傳為恭兄男服海亭尹信  
 永祐二六年 八十三歲

[illegible]















有つふはるけく清の融公事やんり候す如く八重津が  
之をさ人のきよなる次藤の清高よりそのけさうに集れ  
わしくとて常れたる人急げ候きまりあり候よし  
三光院のものいふに重くんとし候きまりあり候よし  
すか宿是人のんじりもさひりりさ小人にんそ所  
然自らのいひも秋白きう候きまりあり候よし

源字之

源色信之弟 兄色患之 乃子之入清和乃子 奥之祿五乃  
 弟乃乃 源色信之弟 兄色患之 乃子之入清和乃子 奥之祿五乃

何れも其の如くはなりけり

[illegible]

二光院より近海を航し、船中にてるる所あり。海内はもと  
竹島といふ所のこゝにありて、島の東にうたがひや。

今度も若くして彼をなかりてて彼をねむるに  
 何れも所詮一云薩具の意よりなり此乃て人金也  
 今に我々がててもも源をてて終に心をねむるに  
 今れり、能き者なりともねむるに、何れも、此世に  
 何れも、てて、何れも、てて、何れも、てて、何れも、  
 何れも、てて、何れも、てて、何れも、てて、何れも、

九十四

大平山館宣和

京大の字を所々と書く

料其の另傳親父之云暦二年八月廿二卒 七十一

[illegible]



十五

陳陳公  
力迎  
尹將  
正尹  
居下  
或說云

来つたれども  
命を  
よらきやうに  
おとす

卷十

除尹瑞

山實多子傳之  
行藏之願云々口爲之實方分代

方花をなすは遷りて終るの國なり軍あり  
 して而も水滸に今て高麗新に改めたる也  
 といれどもうにうそ世實に方薩とてて高麗新は  
 うねりありしなりと云現存するは其なりと云ふに  
 世にうそなりと云ふなり

萬葉集卷之八

[illegible]



藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

母を藤原公成と云ふ

西暦九年に年二十歳

母を藤原公成と云ふ

母を藤原公成と云ふ

母を藤原公成と云ふ

母を藤原公成と云ふ

母を藤原公成と云ふ

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長

藤原道長



儀天之日

日下家  
順國  
停園  
之  
路  
咸惠

中江家田道隆云の家へ後拾遺とて月作あり  
 一馬之系田道隆實隆院迄云有嫡男云々

伊園公

中侯白通

東之多少通

後仁為家  
の徳

新古今

[illegible]

大納言公任

公よりしるすも情なきにあら

号可中太師之  
一官小節乃文  
一榮院內侍  
一郭誦集乃撰者  
一劉白莊公此  
實於人深使書和漢以爲人  
後漢乃主者

流の巻は終るゝ古威の巻は終るゝ流の巻は終るゝ古威の巻は終るゝ

初古に<sup>ハ</sup>身寄に人へ送りたるけり又も薩摩をく薩摩  
より一懐かぬ西行寺の所は薩摩様よりいふ言ひあり  
よあそよりいふ所の名をも此殿に云へしといふ今  
ゆゑに今薩摩をよめたりとすなり成るやうな



まはるをきくわく事乃世りきあわくしち海なるれ  
白くはるくし人なる事れぬ新いさくし川なる  
はるはるくしもの世のまはるくし橋もよの成り

或古くはるはるのなる事れじいしはるはるのなる事れ  
中じいしはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
あひはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ

和泉武部

和泉武部 和泉院の女房大は雅淑女常侍矢張りしはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ

和泉守傳の通員素れ時りあわ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ

わはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ

和泉武部

和泉武部 和泉院の女房大は雅淑女常侍矢張りしはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ

和泉守傳の通員素れ時りあわ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ  
はるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れはるはるのなる事れ



の利由毫流の面影の夢うらむの向なり

光るる夢うらむの面影の夢うらむの向なり

月影の夢うらむの面影の夢うらむの向なり

八十五。大武王伝 集作 室春井 曲之舞武王伝 月影の夢うらむの面影の夢うらむの向なり

有間山いかに京風物もそよふ人歌う終やと傳ふ

大幸山いかに京風物もそよふ人歌う終やと傳ふ







[illegible]

我ながら 大盤に 通像令出 死せしむる

我知不勝感佩之至  
此致  
懷抱

漢書大傳乃史記之  
大史記之  
漢書大傳乃史記之  
大史記之

上東院  
 西宮園自  
 道長非  
 一筆院  
 後一筆院  
 記すことむ名目なりと云ふ乃ち此小幡をこれ  
 にてなり是に多分名目のありてふふ小幡親の女たるに云ふ  
 早稲功左衛門上東院のやうく

一、南の都ハ重祿のころに句をたて

中食申渡  
敦子  
凡九条を  
若松屋に在  
て静養せし  
りといふ

河津は一條の院より赤良の公吉様と人のまうきとて福に  
はましかるものなりと名よめ侍候はれどもありおあす  
あるやう赤良古江に別へられぬ心ずく時あり九重  
又去にゆき酒有るかかられ少く思ふ代の法のかゝり























綾車子云流をどうくほまふ馬明神の白忍海歌

天のりりらららにきびくもをあらうとすし神

あゝ吹三玉の山け地もろくもあゝいりしきり

世名氷菜四幸内裏の分分もろくも吹三玉の山け地

不のふとふいふくもろくも吹三玉の山け地

ろくも吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

何時とてくろくも吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

ち田川地もろくも吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

十七。

良選法師 父祖石洋 祇園の如雲之 恒良原

一説母良選法師の女房 白葉のうらみ

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

十七。

大和言経法 中納言源通方之男 俊頼之入 六条の社

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地

あゝ吹三玉の山け地もろくも吹三玉の山け地















まゝりぞらんしにうきやまのわたりと舟家にありぬる  
て井にすふ海とのさざめくあやしくおもはれど是秘に  
よか舟よりまさきはも今舟舟の多げも堪能たそ  
うしも一休三首あつてよくよきなりと云　大石の道彦守

大船や小舟のちの吹上いのはりくくつゝ帆がたふ  
これにたふしむく舟のまう一客ありいぬとあるは舟屋  
はかのか大船より吹上り沈没するもすきなり船と面を壁  
つきしけしとくすうにいはれどもとては舟と舟は帆  
と帆を舟と舟とくこれ舟のまうくすむ沈没はく

崇德院

鳥羽院第二皇子  
但白河院乃沙世子

二十八年大糸陽云（傳）七月廿日依河邊宮軍於三流溪  
 白川仙洞敗於時（時）竊幸往和寺（和寺）同月十二日出家於三日死（死）三流溪  
 波國長寬二年八月廿日於石山崩又（又）四十六歲矣

まゝにやと云ふはちうにおくし中川よりして母をあるべき所  
送りしよの川よりおぼれしやあつてこの山をさうせむ水乃  
りててもさうおぼれあるや中よりいひおぼれしすけ

[illegible]

源兼昌

宇多源氏二世の孫 俊輔三男 皇居宮内進位下  
衣あねふの集に漢語集と

淡江子

法皇がまゝの如く声にくわね神皇の如く唐の雲より  
 是賞白ちるまゝの如く世を如く神皇の如く唐の雲より  
 神皇の如く神皇の如く神皇の如く神皇の如く神皇の如く  
 神皇の如く神皇の如く神皇の如く神皇の如く神皇の如く



[illegible]

たふとく

張香林三男清輔張公打父之号六条家  
云一流多 何志集乃撰者之

秋はふかく雲のくさる月めおのすやき  
 月書小常陳漢一古言乃をまげまふいありふかくや  
 肝心秋う分にうひをいてさよりいける月まひは  
 あまにまやうかいまふもあまはるあまもまふも  
 一ぬくんまふはる物決にいとすのれは月のお

あらうき利雲くはる月を待ほにやあらうき  
 いちはんたるらん　ふまかひ別れもものあるゆゑ侍で  
 月並酒や、独処でもと座な事幸にいねあふらん  
 人も無事そつていざあふとひきはなりじけふあふ仍乞  
 少飲ともぬやてもなげに定むるらんも志しぬさぶりの  
 さやけきといふ情天の月けさやなるよりすくいはぢぞ  
 るん　是伊波之

十八  
詩賢曰  
隱城

我伯 死侍女 男ありふて七人  
撰集 侍傳 山陰の女房

[illegible][illegible]

しよふね







[illegible]

四十  
原清補知  
死補乃胃之  
供養下本  
是亦文前  
以入達

[illegible]

五十八  
○ 俊恵法師  
源俊賴朝臣の男  
経信の孫

おもしろいなりやめぬ神屋のいへは  
たけなほ  
物ゝあねがうきにはものなりとてやあきくばは  
かりやするあのもあてもなくもあのかしらにこそ  
あねのいへりてすまじきも感く神屋にもゆや  
しにふさむるむらじひのせりのおもひ入はるあや  
ねおる  
しきよむるむらじひのせりのおもひ入はるあや  
ねおる















初とある事は一考に後ねおまひの神成ふといふ  
もののうらゝめは仲もたの満千城をぬきく不取申す間と  
ゆゑともびさる物と常々疑ふにはあつても水磨の石あり  
やともぬおもひなりけり一神神と訂の石坊より今らひ  
玉つくしにはほまれこそ人かまぬゆゑとていへば  
うらふ仲の石なくとも初とて城をのむより、度公河、水磨の  
石、石利をわしは能古所所の廿居れ中一室の中殊極一  
所へ来て前後したる

漢書古本

[illegible]

世の中常々とわたり諸君を待つに如くは終るなり

はな題より中々物一冊も取れ集一冊と一字題大撰集一冊  
 強の部一今わゆる家一々々常れ可くんれ秘授う 七頁  
 物名はうらうら

世に成行を人知れず備の舟にあふるを辰

陸奥忠臣の遺言 浦清舟の遺言

[illegible]

朱熹雅經

五音の安秘のうまき古墨のうまき







新くも度のをきくものごとくはきくふ花をゆかりに  
 人へおかしきまゝをゆかりに我々の度もやうそ  
 うまゆふ花をゆかりに我々の度もやうそ  
 花をゆかりに度のをきくものごとくはきくふ花を  
 ゆかりに度のをきくものごとくはきくふ花を

九  
 七  
 中納言宣  
 俊成卿乃富号三京位  
 乃通  
 由右

[illegible]

十月十日歲次己未八月十日薨  
年六十二位勳奉  
探者少人位又後居以統執一歸  
部勳撰集詩志

[illegible]

祇はあとも有海風をたづねてあかたきしむるに  
何にたづねていこむるに又たきしむるに浦の  
入るに海風をたづねていこむるに又たきしむるに  
あかたきしむるに海風をたづねていこむるに  
何にたづねていこむるに又たきしむるに浦の

杉之井

ぬけ而人一首は宝紙のへんたわううけを團籠より  
 宝紙もねいふ紙合の半宝紙は宝紙のある方  
 るあひしとちの宝紙きつてたふ人たに杭の浦  
 ねおゆりゝ富の人と事ね新古今のくろくふそ  
 宝紙とねいれと共ある紙のむ物たれと宝紙と  
 わるゝとねとねいれと宝紙とねいれとねいれと  
 ねらぬと

後二任家隆

老陸二翁 如名雅隆 新古今撰者久しく  
後藏々 門才才下とく 寧道法所 尊之

[illegible]



河書に寛喜元年 芥入内乃以彦内により 橋本川賊名  
 橋本八幡の方にさし川へ山後城、心事百等

河後をわかれ川のほとりへ、のうを渡ふちに終る

[illegible]

後馬好洗

金院寺に在りての如きや

壬辰年八月、義久二年七月八日信玄公之事於當時所記年月一々を依る

源氏由延應元年二月方之京師就新  
乙未氣

今も人々を驚かし、わが世の世にあらざる身は  
 世を中たふすかゝる海客と陳腐の世にあらざる身は  
 沙門やばつたれと王通の世にあらざる身は  
 かくも思ふに世の世にあらざる身は  
 あらざる世にあらざる身は

[illegible]

百〇  
須誼院

海陽初院中二十日壬午  
同奉七月九日亥校  
庚戌年九月十一日  
四十二日校於庚戌年九月十一日

百瀬やゆき新堀の世つゝ母なひあもるあふし一雨利  
百まに求家にいにならば千重家流之百まに流て所なれに秋草ぞ  
りこまに流て秋草をふりて野や小初瀬やなほ秋草に秋草  
万んよりりまの世になれかしと母なふとふいなりと母



[illegible]

五  
十  
十  
十

かきしめしむる橋は不菊にみちてしおのゝ

秋の紅葉をうき鳴鹿のうきくさす秋の光  
 月を居る花のうきくさす秋の光  
 秋の光をうきくさす秋の光  
 秋の光をうきくさす秋の光

○七首  
書乃歌

足栗山多の流りてつらねたものなり  
わくとふもやういふ所の片と云々とあつてもあるを  
よめのはさるゝに別とういへつゝありては病室に  
こぬ人松根の南にはあけふ夜とも身ここれは  
天の京ゆきける程に吾城云々のしりか月々  
吹くは秋の来たるべき時ぞとむね山内氏のときん  
世の中ハ常にもかならず清濁のちがひは絶えなれども

存心之脈絡

秋の国より 稲の穂が 心づくし 赤穂の 小笠原 舟中



此世之場午にふくむ神の衣人今もふくむ衣なり  
 久し経て門田の衣なり  
 此世の衣なり  
 此世の衣なり

此世の衣なり  
 此世の衣なり  
 此世の衣なり  
 此世の衣なり

長家  
 忠家  
 俊忠  
 俊成  
 定家

〇 爲氏  
 爲也  
 爲通  
 爲定

〇 爲教  
 爲教  
 爲教  
 爲教

〇 爲秀  
 爲秀  
 爲尹  
 爲之  
 爲富  
 爲廣

〇 爲顯  
 爲顯  
 爲顯  
 爲顯

爲守  
 爲守  
 爲守  
 爲守

右此百人一首師說鈔堅以哲言今傳受  
 処之及秘歟之切紙註家者名目皆是無  
 非師說故以號焉門第之外割他見公有恐  
 和哥三神者也可秘之穴賢

吾立拙未芽法印祐海鈔之

右書寛保二年八月

山田氏











